公益財団法人 住友財団 ニュース

第29号・2026年10月

＜News＞

- 好きこそものの上手なれ ～ 砂合先生のノーベル賞受賞に寄せて
- 主な活動実績（2026年8月～10月）
- 2026年度「基礎科学研究助成」助成先決定
- 2026年度「環境研究助成」助成先決定
- 住友コンフェレンス2026

好きこそものの上手なれ ～ 砂合先生のノーベル賞受賞に寄せて

今年のノーベル化学賞は、東京理科大学の砂合憲三名誉教授が受賞されました。昨年に続く日本人受賞の報せを受け、日本中に祝福の声が溢れました。

今回の受賞に関しては、「この研究は、すぐに産業のプラスになるものではないが、重要な基礎研究である」という評価があります。

最近の日本人ノーベル賞受賞者の言葉

砂合憲三先生	「まだまだ面白いことがあるはず」
北川進先生	「これまで新しいことにチャレンジして、つらいこともあったけど、30年以上楽しんできた」
坂口志文先生	「自分が興味のあることを大切にする。また、それをずっと続けることによって新しいものが見えてくる」

ノーベルは遺言で、ノーベル賞は「人類に対して偉大な利益（the greatest benefit to humankind）をもたらした者に与える」と明言しています。一方で、「近年のノーベル賞は応用や実用化を重視する傾向があると感じる」という声もありました。その中で、今回の受賞は、「良い研究とは産業にプラスになることだけではない。純粋基礎におけるすばらしい驚きの研究に光を当てた」（野依会長）というものです。

近年ノーベル賞を受賞された方々が異口同音におっしゃるのは、「自分の興味のあること」を「楽しんできた」というものです。評価されるために論文の数を競うのではなく、自分の好きな研究をとことんやり続けた結果として評価されたい、そんな研究者の思いに住友財団は応えたいと思っています。

「好きこそものの上手なれ」 言い古された言葉ではありますが、まさにその通りなのでしょう。子どもが夢中になって絵を描くように、研究者には研究に没頭して頂きたい。昨年度から住友財団は、基礎科学研究助成の募集要項を大きく変更しています（P2参照）。限られた予算の中ではありますが、好きな研究を突き詰めていく研究者の一助になれることを願っています（日野）。



主な活動実績（2026年8月～10月）

9月	アジア諸国における日本関連研究助成 募集（9/1～10/30迄）
9月	2026年度 基礎科学研究助成 第二回選考委員会開催（9/1） 2026年度 環境研究助成 第二回選考委員会開催（9/7）
9月	住友コンフェレンス2026開催（9/19）
10月	国内外文化財維持・修復事業助成、修復文化財展示事業助成 募集（10/1～11/30迄）
10月	第78回理事会開催（10/6）

©2026 The Sumitomo Foundation

2026年度「基礎科学研究助成」助成先決定

2026年度も、4／15～6／30募集、その後の選考を経て、10月理事会で助成対象が決定されました。昨年度、若手研究者により手厚い支援をするために大幅な制度改正を行い、2年目となりますが、1件平均の助成金額の増加などが進む結果となりました。

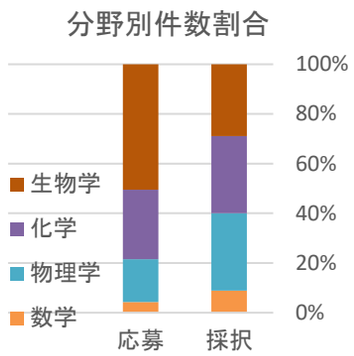
【2025年度の主な制度改正】

・応募可能年齢は45歳以下とする。

・応募対象となる研究分野は「数学・物理学・化学・生物学」（複合分野や工学の基礎分野の研究は各分野に含まれる）とし、該当すると思われる研究分野を申請者自らが指定して応募する。

・助成金額は申請金額と同額とし、減額しない。

・助成金総額を2億円とし、数学を除き各分野ほぼ同額の助成金配分とする。



【応募状況】

応募件数は963件と昨年度より78件増加しました。分野別に見ると、数学41（昨年比＋14）件、物理学166件（同＋22）件、化学270（同＋45）件、生物学486件（同－3）件でした。
申請金額の平均は435万円と昨年度より46万円増加し、過去最高であった昨年をさらに更新しました。
応募者の平均年齢は38．6歳となり、昨年より0．3歳上昇しました。

【選考・採択状況】

選考は、例年通り選考委員長を含む13名の選考委員によって、2回の選考委員会を通じて実施されました。

今年度の採択件数は45件、昨年比では11件の減少となりました。分野別に見ると、数学4件、物理学および化学は14件、生物学は13件となり、数学以外の分野で昨年比3～5件減少しました。応募件数の多かった生物学の申請者には昨年よりもさらに厳しい採択率となりました。また、助成金総額は2億135万円で、1件平均447万円は昨年比90万円増加の過去最高、助成対象者の平均年齢は38．4歳で、昨年から1．1歳上昇しました。

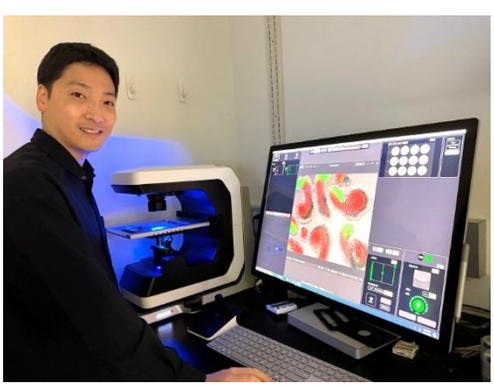
【採択された研究者と研究内容の紹介】

今回海外の大学に所属する日本人研究者が3名採択されましたが、そのお一人を紹介 したいと思います。

ワシントン大学（米国シアトル） 産婦人科

テニュアトラック助教 浜崎 伸彦さん

研究テーマ：**「ヒト体軸発生における自己組織化の原理の解明」**



○海外の大学（ワシントン大学）へ赴任された理由

自分の中の研究者としての幅、特に働き方や考え方、サイエンスの進め方についての幅を広げたくて6年前に渡米しました。
ただ、当時の考えとしては、将来後悔しない選択肢を選んだと言った方がより正しいかもしれません。

○応募のきっかけ

ヒトの体がどのようにつくられるのかという基礎的な問いを、幹細胞を使って追究する研究を進めるためです。体の軸が生まれる仕組みを実験的に調べ、その原理を明らかにする研究への支援を求め、応募しました。

○この研究テーマを取り上げた理由

私たちの体は、一つの細胞から生まれた多様な細胞が組織をつくり、組織同士が互いに影響し合うことで形づくられます。その過程には、分かったつもりでも実は分かっていないことが多く残っています。新しいモデルをつくる楽しみは、普段は疑問すら持たない根本的な問いに気づき、それを実験で確かめられるようになることです。今回は、体の前部と後部に対応する組織を別々につくって組み合わせるという、実際の胚では起こらない状況を逆に利用し、体づくりを支える自己組織化の原理に迫りたいと考えています。

○この研究の可能性と今後やりたいこと

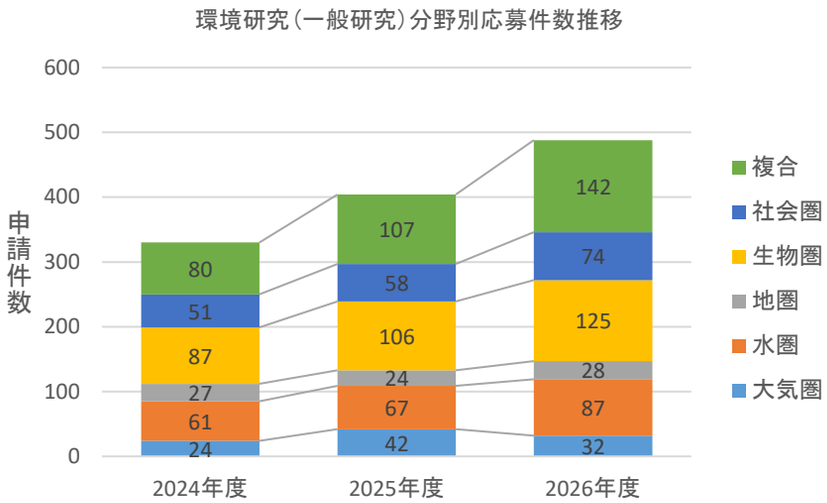
こうした組織同士の協調的な自己組織化は、体づくりのさまざまな場面で起きていると考えています。今後は、そこに共通するルールがあるのか、あるとすればどのようなものなのかを探る方向へ、研究を広げていきたいと思います。研究が進むことで、今は想像していない現象や、体づくりの見方が変わるような発見にも出会えるかもしれません。一つの発見が次にどんな研究につながり、そこから何が見えてくるのだろうと、今からとても楽しみにしています。

2026年度「環境研究助成」助成先決定

2026年度も、例年通り4／15～6／30募集、その後の選考を経て、10月の理事会で助成対象が決定されました。

【応募状況】

一般研究の応募状況は、488件（前年度比＋84件）と前年度比2割の増加となり、右表の通り、今年度も多岐にわたる申請がありました。募集課題を「地球のネイチャーポジティブを実現するための学際的または国際的研究」とした課題研究は、前年並み47件の応募がありました。



【選考・採択状況】

今年度の選考は、選考委員長を含む8名の選考委員によって2回の選考委員会を通じて実施されました。採択は、一般研究が22件（総額7千万円）、課題研究が3件（総額3千万円）の合計25件（総額1億円）となりました。（前年度は一般研究31件、課題研究3件の34件）。一般研究については、応募数の増加、採択数の減少により、採択率は、前年度の7．7%から今年度4．5%へ低下しました。分野は、自然科学系19人、人文社会科学系3人となり、所属機関別では20機関と、1大学・機関に最大2人と分散化したのが今年の特徴です。採択者の平均年齢は42．5歳となり、23歳から55歳まで幅広く分布しております。また、女性の採択者は4人と昨年度比3人減少しましたが、最年少採択者は大学院修士1年生（23歳）女性をはじめとして優れた研究提案が多数ありました。助成金額は、平均318万円と前年比92万円増加し、申請金額に対する平均充足率は71%となり、前年の69%から改善致しました。査定金額の最大は500万円、最小は140万円でした。課題研究については、地球のネイチャーポジティブを実現する為の様々な課題に関して正面から向き合った研究提案が多数寄せられ、その中から3件が採択されました。2027年度のテーマは、新たに「プラネタリーヘルスを追求する学際的または国際的研究」に決まりました。

【採択された研究（課題研究）事例紹介】

「ネイチャーポジティブの地域実装を支える学際的自然資本評価指数の開発と社会実証」

（龍谷大学 先端理工学部・教授　山中 裕樹 他6名による研究）

（研究概要）

水や空気に漂う生きものの「DNAのかけら」を調べる環境DNA分析を使えば、生きものを捕まえなくても、そこに何がすんでいるかが分かります。私達はこの技術で琵琶湖の自然の“健康状態”を数字で表す指標をつくってきました。本研究では、これを企業や地域がお金の判断に使える「自然の会計簿」へと発展させ、地元企業・銀行・地域ファンドと一緒に、自然を守る取組みが経済的に報われる仕組みを滋賀から実証します。


【龍谷大学、深草キャンパスにて山中教授近影】

〇住友財団の研究助成に応募したきっかけ

滋賀県の委託事業で開発した生物多様性の指標（BCCI: Biodiversity Conservation Composite Index）を企業の会計や金融の仕組みにまで組み込む次の段階に進めたいと考えました。こうした学際的研究を地域の中小企業や金融機関と組んで実証する私達の挑戦的な研究は、貴財団の課題研究テーマにまさに合致すると考えました。

〇助成が決まった感想

異なる分野のメンバーが頭を突き合わせて練り上げた提案を評価していただき、共同研究者一同、大変喜んでおります。

〇この研究の可能性と今後やりたいこと

2年間で自然の状態を「資産・負債」として評価する新しい指数（NPCI: Nature Positive Composite Index）の試作版をつくります。そのうえで金融機関における投資・融資・預金といったサービスにどう運用できるか、企業におけるポジティブ・インパクト創出で経営判断にどのように活用できるか、自然を守るファンドにおける評価でどう実行性を持たせるかなどに試験的に活用し、自然を守ることが地域の経済にもつながる「現代の三方よし」のモデルを滋賀から発信したいと考えています。

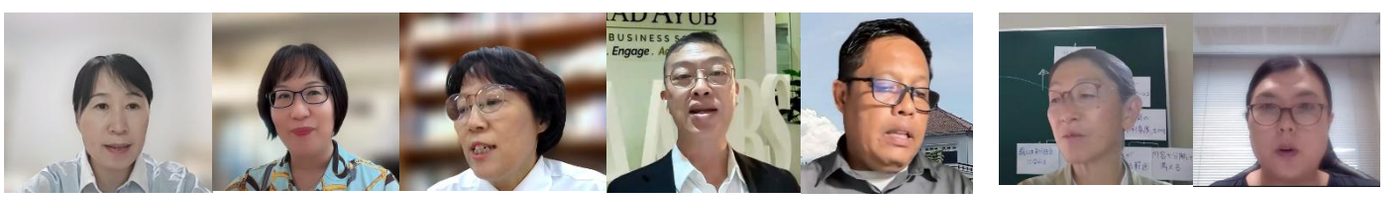
住友コンフェレンス2026

9月19日(土)、住友コンフェレンス2026を東京大学東洋文化研究所GAS(Global Asian Studies)プログラムとの共催により、オンラインで開催しました。

本コンフェレンスは、「アジア諸国における日本関連研究助成」の発展的取り組みとして、過去の助成対象者による研究成果を発表・共有するとともに、アジア各国の研究者相互ならびに採択当時の選考委員との交流の機会を提供することを目的とするものです。

4回目となる今回は、2021年度助成対象者から選出された5名が、「文化実践としての人の移動(Human Mobility as Cultural Practice)」を共通テーマとして発表しました。人の移動をめぐる多様な文化的実践や社会的背景について、それぞれの研究成果に基づく報告が行われました。60名以上がオンラインで参加し、司会者および討論者による示唆に富む問題提起のもと、有意義な意見交換が行われました。

研究分野や国・地域を越えた活発な議論を通じて、「アジア諸国における日本関連研究助成」の研究成果を広く共有するとともに、今後の助成事業のさらなる充実に資する機会となりました。



アジアの日本研究(4):文化実践としての人の移動



司会　園田　茂人(東京大学・特任教授)
挨拶　当財団 日野常務理事・事務局長
日程　2026年9月19日(土)14:00−17:00

第Ⅰ部　戦時期日本の越境移動(日本語セッション)
・「東亜同文書院学生の中国山東省における体験」 曲 暁燕(山東師範大学・講師)
・「保存された味:日本統治下における台湾の缶詰産業、1895-1945」 曾 齢儀(台北医学大学・准教授)
・「帝国日本における女性の移動と高等女学校 ―京城第一高等女学校同窓会〈白楊会〉を事例として―」
宋 恵敬(高麗大学校・研究教授)

討論者　清水 麗(麗澤大学・教授)

第Ⅱ部　比較研究的観点からみた日本旅行(英語セッション)
・「マレーシアの高齢者が自立して有意義に生活できるようにするための『ふれあい切符』の概念の認識と使用:日本からの教訓」 タン・ペック・レオン(マラ工科大学・准教授)
・「日本人、インドネシア人、マレーシア人の間の異文化理解において観光が果たす役割:北海道、バリ、ペナンの事例から」 ヌル・ウィディヤント(ジョグジャカルタ・アンバルクモ観光専門大学・上級講師)

討論者　森下明子(同志社大学・准教授)

＊本コンフェレンスにおける過去の発表内容はデジタルブックレットとして、東京大学東洋文化研究所GASプログラムのウェブサイト(https://gas.ioc.u-tokyo.ac.jp/outreach/)に掲載しています。

デジタルブックレットはこちら

〒105-0012　東京都港区芝大門1-12-16（住友芝大門ビル2号館）
TEL:　03-5473-0161　FAX:　03-5473-8471
E-mail:　foundation@sumitomo.or.jp
URL: https://www.sumitomo.or.jp/